

# 令和2年度 集落活性化事例集

令和3年5月

鹿児島県総合政策部地域政策課

## ～ 目次 ～

- 1 日置市高山地区  
～住民全員がNPO法人の会員になって地域づくり～ P1
- 2 枕崎市木口屋地区  
～子育てNPOと高齢集落の相乗効果～ P3
- 3 指宿市川尻地区  
～できる人が！できる時に！できる事を！～ P5
- 4 さつま町中津川地区  
～地域の伝統芸能を核に集落を活性化～ P7
- 5 霧島市中津川地区  
～移住者と地域住民が力を合わせて地域づくり～ P9
- 6 鹿屋市高隈地区  
～コミュニティ協議会による地域活性化～ P11
- 7 垂水市大野地区  
～地元特産品を生かした集落の活性化～ P13
- 8 龍郷町荒波地区  
～地域おこし協力隊制度の活用がきっかけ！～ P15
- 9 宇検村崎原地区  
～地域で支える親子山村留学～ P17



# 1 日置市高山地区(高山地区公民館)

～住民全員がNPO法人の会員になって地域づくり～

## 【地区(集落)概要】

- ・人口(令和3年4月1日現在)  
153人(男性:63人, 女性90人)
- ・世帯数(令和3年4月1日現在)  
98世帯

- ・年齢構成  
0～14歳:2人 14～64歳:44人 65歳以上:107人
- ・取組主体  
高山地区公民館



## 活動のきっかけ・スタート

・急激な人口減少による児童減少が続き、平成4年に地区内に唯一あった「高山小学校」が閉校

→ 平成8年、若者の地域離れと人口減少を食い止めようと小学校跡地を活用した「高山地区交流センター」が開設



学校だけに頼らない、地域で考える地域づくりを目指す！

## 活動における転換点(転換期)

・棚田の農地保全や高齢者の送迎支援など喫緊の課題に直面する中、「地域住民の」、「地域住民による」、「地域住民のための」地域活性化を図るため、NPO法人の設立を目指す。

→ NPO法人設立に係る勉強会、住民アンケートやワークショップを通じた地域住民の合意形成や事業計画の作成

★平成25年3月、集落全員が会員となる「NPO法人がんばろう高山」を設立  
→ 地域住民が積極的になり、前向きな姿勢へと変化(地域で経済を回す！)

## 活動の中で苦労した点

・過疎化、少子高齢化を受け、地域行事に参加する人が不足



(地域内住民)  
地域住民で地域行事に参加してくれた人には、手当を支給  
→ 高齢者も必要とされているという意識付けにより、地域活性化に大きく寄与

(地域外人材)  
お嫁さん、子、孫、ひ孫など地域外の人への協力をもたらって地域に活力を生み出す  
→ 地域行事を通して、ふるさとに愛着が生まれる。

## 活用した支援策(国・県・市町村)

- 市: 農林水産振興事業補助金(H28年度)  
ふるさと水と土基金・棚田基金(H30年度)  
日置市地域づくり推進事業交付金(ソフト事業)(H21年度～)  
日置市地区自治公民館活性化事業交付金(主任人件費等)(H21年度～)

## 連携団体

日置市: 市の交付金を活用し、高山地区の地域活性化を推進

## 代表者コメント



・活動を開始する際には、苦労があるのは当たり前です。高齢化率70%の地域でもできることはたくさんあります。  
・先を見据えて、イメージを持って活動すること、地域を大事にする心が大切です。

099-274-9856(高山地区公民館)

きっかけ

児童減少による  
高山小学校の閉校

### ステップ1

- ・小学校閉校の際、跡地を宿泊施設に利用することを自治体に申し入れ、交流人口の拡大を図る。
- 地域内外の交流を図る施設として、「高山地区交流センター」を開設



### 活動を通じての喜び

- ・稼ぐことができるようになったことで、農作物を作ることが生きがいになるとともに、病院に行く回数が減るなど健康的になった。
- ・買い物ツアア一等の実施で住民から感謝の言葉も多かったり、絆が強くなったと感じる。



### ステップ2

- ・平成10年から高山地区交流センターの宿泊研修施設の機能を生かし、スポーツ少年団や大学サークルの合宿等の受入を開始
- (夏休み期間中) 延べ約600人が利用
- (年間)約5,000人が利用
- 合宿で訪れた大学生と地区住民との交流機会も生まれ、棚田の散策や高山ふさと秋祭りの運営ボランティアなど地域行事への協力に発展(継続的な交流！)



### ステップ3

- ・地域活性化のために高齢者の支援を図る目的で「NPO法人がんばろう高山」を設立(集落全員が会員)
- 棚田保全や農業体験の受け入れ、交通手段のない高齢者の移動支援に取り組む。
- 車の運転ができずに農作物を出荷できない住民のために、生産した農作物を集めて回り、江口蓬莱館に一括して出荷する事業を開始(農作物の収益化に繋がる！)
- さらに、集荷の際に同館の商品カタログを配布し、一括した注文の取りまとめと商品と商品を配達する事業へ展開



### ステップ4

- ・6次産業化を目指し、令和元年5月に空き家を活用した「たかやま峠茶屋」をオープン
- 地域で稼ぐ仕組みの構築、農家の生産意欲や高齢者の生きがいに結びつく。
- 災害時の避難場所や地域住民の交流の場所としても活用！



### 今後の目標

- ・住民の交通手段の提供は継続し、更なるサービス向上を図る。
- ・空き家を活用した「古民家カフェ」の開設を検討中
- 料理の提供や農産物・加工品の販売により、地域住民の所得向上を図る。
- ★行政に頼り過ぎない、コロナ禍にも対応できる持続可能な地域を目指す。

## 2 枕崎市木口屋地区 (NPO法人子育てふれあいグループ自然花)

## ～子育てNPOと高齢集落の相乗効果～

### 【地区概要】

- ・人口(令和3年3月1日現在)  
48人(男性:24人, 女性24人)
- ・世帯数(令和3年3月1日現在)  
32世帯

- ・年齢構成  
0～14歳:4人 15～64歳:20人 65歳以上:24人
- ・取組主体  
NPO法人子育てふれあいグループ自然花



### 活動のきっかけ・スタート

- ・児童養護施設職員として勤務していた職員が、自然の中で親子で様々な体験が出来る場を提供したい。
- ・活動拠点となる古民家を探していたところ、当集落を紹介される。

→田舎には、親子がお互いの役割を認め合い家庭を構築するプロセスがまだ残っているのでは。



古民家を自ら改修し  
活動拠点にする。

### 活動における転換点 (転換期)

- ・集落と一体となった取組が、新聞やテレビなどメディアで取り上げられた。
- ★集落における日々の活動が大事であることの再認識
- ★これまでの活動が評価され、励みになった。
- ★集落の方々からのアイデアを生かして、取り組みの幅を広げる！！

### 活動の中で苦労した点

- ・活動の運営等の苦慮
- ・立ち上げ時から10年以上が経過し、当初から参加している方々も高齢化。無理をしないでいかの心配(理事長が集落の方々を心配)



### 活用した支援策(国・県・市町村)

国：過疎地域等集落ネットワーク圏形成支援事業(平成29年度)  
県：木とふれあい環境づくり推進事業(令和2年度)

### 連携団体等

- ・地元高校生
- ・鹿児島大学フリースポット
- ・活動に賛同してくれるボランティア など

### 代表者コメント



- ・無理をせずに行うことが継続の秘訣です。
- ・「頑張らない」をモットーに活動しているから皆で同じ方向を向いて活動できています。

大脇理事長

0993-58-1888

(NPO法人子育てふれあいグループ自然花)

## ステップ1

### きっかけ

- ・親子で一緒に、様々な体験をさせたい。
- ・子育てに悩む保護者が気軽に相談できる場を作りたい。

- ・古民家を改修し、活動拠点づくり
- ・自然体験や農業体験を近隣の保育園や学童へ声かけ。  
★子どもがいなかった集落に、元気な声が響く！
- ・農業経験のないスタッフへ集落の人々が心配し支援  
★集落との絆が芽生える。

### 活動を通じての喜び

活動を行う際、集落の人々が必ず一緒に関わってくれる。人との出会いに喜びを感じる。

(集落の人々の声)  
法人のスタッフの手柄が一番。地域との活動にいつも真剣に取り組んでくれる。その姿を見ると助けたくなる。



## ステップ2

- ・集落との関わりの増加  
→子ども達の元気な声が、集落の人々を呼び込む。集落の活性化！
- 法人の様々な行事を合同で開催  
餅つき、味噌作り、かからん団子、そうめん流し など  
→集落からの野菜の差し入れ



## 今後の目標

- ・集落との関わりは今後も継続  
→子育て支援(家庭の学習支援)  
→高齢者と子どもとの交流  
→週末の駄菓子屋 など
- ・集落の行事の復活  
→十五夜の綱引き など
- ・集落への恩返し(法人の思い)

## ステップ3

- ・空き家対策事業を活用し、古民家再生塾を開催。改築の技術を学ぶ。
- ・古民家の改築後は、  
→古民家レストラン  
→親子の料理教室  
→修学旅行生の受入れ  
→移住希望者向けのお試し住宅として活用



(ひだまりの家)

### 3 指宿市川尻地区（川尻元気プロジェクト実行委員会）

～できる人が！できる時に！できる事を！～

#### 【地区概要】

- ・人口（令和3年2月1日現在）  
1,448人（男性：638人，女性810人）
- ・世帯数（令和3年2月1日現在）  
828世帯

- ・年齢構成  
0～14歳：92人，15～64歳：623人，65歳以上：733人
- ・取組主体  
川尻元気プロジェクト実行委員会



#### 活動のきっかけ・スタート

- ・地区内の子どもが減少し，小学校再編の話が持ち上がる。（平成29年）
- ・自分達で何かできることはないか？  
→子どもが増えれば  
→子どもが増えるには，家族を地区に呼び込めば  
→地区に呼び込むには住居が必要



地区内に多数ある空き家を活用すれば！！

#### 活動についての転換点（転換期）

- ・活動を開始し，1件目の契約が成立した時  
（平成29年12月：活動開始  
→平成30年4月：プロジェクト立ち上げ  
→平成30年6月：1件目契約成立）

★空き家登録→空き家道具搬出  
→マッチングが実を結んだ！

★1件目の契約成立後は，問合せなども増え，地区内でも活動が知られるようになった。

#### 活動の中で苦労した点

- ・地区内におけるプロジェクトの存在を認知してもらうまでの活動

※具体的にを行った活動

- ・のぼり旗や懸垂幕の作成  
→公共施設や商店街に設置
- ・プロジェクトだよりの発行  
（活動報告，寄付のお礼  
移住者情報 など）  
→地区内全戸に配布
- ・かわしりげんきマルシェの開催
- ・市や区の行事に参加  
→神輿担ぎ など

#### 活用した支援策（国・県・市町村）

県：「元気な南薩」応援事業（平成30年度～令和元年度）  
市：地域提案型空き家活用事業（平成30年度～令和2年度）

#### 連携団体

指宿市：空き家活用における補助  
家財道具搬出等におけるリサイクルの減免

#### 代表者コメント



竹畑代表

- ・何事も動かないと始まりません。自分達の思いを具体化しましょう。
- ・無理はせず，自分の身の丈にあった活動をしましょう。「できる人が！できる時に！できる事を！」

0993-32-2141（川尻元気プロジェクト事務局）



きっかけ

- ・地区内の子どもが減少
- ・小学校再編の話が持ち上がる。

### ステップ1

- ・空き家を活用した若い世帯の移住を手助けしたい。
- ・地区役員や区民に説明し、総会にて承認  
→地区内の有志の若者を中心に、川尻元気プロジェクト実行委員会を立ち上げ（平成30年4月）  
※令和3年1月末現在：40人



### ステップ2

- ・のぼり旗や懸垂幕の作成・設置
- ・独自の空き家マップの作成

- ・空き家情報を求めるチラシの作成・配布
- ※住民へ自分達の活動周知が主な目的



### 活動を通じての喜び

- ・空き家登録→空き家具搬出→マッチングまでの一連を通じ、契約が決まり、地域に新たな人が入ってきた時
- ・自分達の活動が地域に浸透してきて、活動中に住民から声をかけてもらえるようになった。



### ステップ3



※ピンクのポロシャツが活動の目印

- ・空き家登録可能な家の家財道具を搬出
- ・空き家の管理（草刈りなど）も可能な範囲で。

- 令和3年1月末現在
- ・家財道具の清掃活動：18件
- ・橋渡し件数：16件
- ★16世帯（41人）が移住  
→若い世代の移住



「できる人が！できる時に！  
できる事を！」がメンバーの  
合言葉

### 今後の目標

- ・これまでの活動は継続  
→未だ解決に至っていない課題＋3年間で新たにみえてきた課題
- ★川尻地区地域創造ネットワーク  
(地域が縁ぐ仕組み、生き抜いていく仕組みを5年計画で創造)
- ★2025年までに川尻元気プロジェクトから独立した組織体制（NPO法人など）を目指す！

### ステップ4

- ・DIYリノベーション講座による空き家改修（技術習得）
- ・モデル空き家による居住ではなく、地域拠点づくり（移住者交流、子ども達の学習支援、高齢者サロンなどに活用）



## 4 さつま町中津川地区(中津川区公民館)

## ～地域の伝統芸能を核に集落を活性化～

### 【地区(集落)概要】

- ・人口(令和3年5月6日現在)  
866人(男性:408人, 女性458人)
- ・世帯数(令和3年5月6日現在)  
425世帯

- ・年齢構成  
0～14歳:89人 14～64歳:362人 65歳以上:415人
- ・取組主体  
中津川区公民館



### 活動のきっかけ・スタート

- ・集落の人口減少による将来への不安が高まる。(昭和60年:1,618人→平成2年:1,446人(-10.63%))

→平成6年,「中津川地区地域づくり活性化計画」を策定し,住民による地域活性化を目指すことに。



- ・大石神社の『金吾様踊り』に賑わいを取り戻す。
- ・『大念仏踊り』を復活させる。

※金吾様...島津4兄弟3男 島津金吾歳久公

### 活動における転換点(転換期)

- ・平成25年に各公民会の青壮年で垣根を超えて構成する「吾友会」を結成

→『金吾様踊り』の踊り手をはじめ,校区案内看板製作や地区イベントの企画運営など幅広い活動に取り組む。

→テレビや新聞などの取材等も増える。

- ★集落に観光客が訪れるようになり,また,若い世帯の移住者も増加!

### 活動の中で苦労した点

- ・昭和30年当時の踊り手であった各集落の高齢者に踊りの詳細を聞き取り  
→半世紀も前のことで記憶が不鮮明で詳細がわからない。

- ★当時の写真や資料を参考に踊りや衣装・道具の再現



### 活用した支援策(国・県・市町村)

町:地域元気再生補助事業(平成23年度～)  
※財源の多くを自主財源でまかなっている。  
(焼酎「金吾さあ」,唐芋の販売,なかつこ朝市,のぼり旗の製作など)

### 連携団体

- ・中津川小学校(踊り手)
- ・吾友会
- ・ゆめはな会
- ・恵光保育園(踊り手)

### 代表者コメント



地域の特徴を核として,責任者だけでなく,地域住民が主役となって取り組むことが大切です。

0996-57-0884(中津川交流館)(火・木曜日の午前8時30分～午前10時)  
0996-53-1111(さつま町企画政策課)

## きっかけ

- ・『金吾様踊り』に賑わいを！
- ・『大念仏踊り』を復活させたい！

## 活動を通じての喜び

活動を行うと、小学生くらいから協力してくれるようになるため、若い世代との交流が生まれ、地域住民同士のつながりが生まれることが喜びになっている。

## 今後の目標

- ・宿泊や立ち寄り場所をつくり、地域経済が活性化し、補助金に頼ることのない稼げる集落を目指す。
- ・観光で来た人も一緒に金吾様踊りを踊るなど、外部の人と地域が融合し、より一層賑わいのある祭りになることを願う。

## ステップ1

- ・平成15年、各集落から集まった青壮年で「金吾様踊り活性化実行委員会」を結成→当時(昭和30年)の踊り手の方や写真や資料を参考に振り付けの練習が始まる。



- ★平成22年、『大念仏踊り』の一つである「地割舞」が復活。観客数が増加(平成15年:100人→現在約1,600人)

- ★中津川住民としての誇りも復活！

## ステップ2

- ・平成19年から地区内の遊休農地を利用して、さつまいもを栽培し焼酎「金吾さあ」の製造・販売→『金吾様踊り』の財源に！

- ・『大念仏踊り』の復活がきっかけとなり、平成23年「なかっこ朝市」を実施し、野菜や加工品の販売→地域の子どもから高齢者までが一堂に集まる場所となる。



## ステップ3

- ・平成25年、「金吾様踊り活性化実行委員会」のメンバーが、「過疎が進む地域を何とか盛り上げたい」と「吾友会」を結成→農業支援、地区案内看板製作、

小学校との交流活動、町の婚活イベントへの参画などに取り組む。

- ★移住者の増加！（平成26年以降、世帯主が20代～30代の6世帯がUターン）

- ★後継者の育成にも寄与

## 5 霧島市中津川地区（中津川地区自治公民館）

～移住者と地域住民が力を合わせて地域づくり～

### 【地区概要】

- ・人口（令和3年3月1日現在）  
862人（男性：411人、女性451人）
- ・世帯数（令和3年3月1日現在）  
505世帯
- ・年齢構成  
0～14歳：28人 15～64歳：349人 65歳以上：485人
- ・取組主体  
中津川地区自治公民館



### 活動のきっかけ・スタート

【地域資源への気づき】  
「魅力ある自然があるにもかかわらず、なぜ活用されていないのか？」という地域外から移住された方の疑問（平成28年）  
→当たり前となっていた地域の魅力を再認識！

【地区ならではの地域資源の活用】  
日本一と呼ばれた茶樹の活用。  
→広場しかないのはもったいない。

地域の憩いの場を整備！

### 活動における転換点（転換期）

- ・移住者と地域住民が協働し地域活性化  
【平成28、29年の取組】  
青年会議所や地域の運営委員会へ積極的に参加  
→地域が有する魅力や課題を認識するとともに、地域住民との関係深化。  
★地域活性化へ向けた取組（憩いの場整備）へ始動！  
【平成30～令和元年】  
大茶樹公園に拠点整備を行うための地元自治体との協議  
→自治公民館長の協力のもと調整  
【令和2年】  
★年輪堂（地域の憩いの場）整備！

### 活動の中で苦労した点

- ・移住された方が主導する地域活性化策の取組に対する地域住民の理解  
→地域住民に理解してもらうためには、まず、移住者が地域に溶け込むことが必要  
★積極的に地域活動や交流の場に参加する。
- ・地域を活性化するには、地域外に向けた情報発信を行うことが肝要  
★クラウドファンディングなどを活用した情報発信  
（移住者のスキルを活用）

活用した支援策（国・県・市町村）

市：行財政使用料減免（令和2年度～）

### 連携団体

霧島市：大茶樹公園の管理者である市が中津川地区自治公民館へ管理業務を委託

### 代表者コメント



邊田公民館長

地域を活性化したい！との思いは皆同じで、地域が一体となり霧島連山が一望できるこの場所に地域の拠点ができました。今後、年輪堂の存在を広め、子供から高齢者まで世代を超えた交流や都市部との交流にもつなげていきたいです。

0995-64-0952（霧島市地域政策課）

きっかけ

移住者ならではの  
外からの視点で、  
魅力ある地域資源  
の再発見

### ステップ1

- ・ 里山ならではの地域資源を有しているが、地域活性化に向けた具体的な取組については、高齢化した地域住民だけではなかなか進まない。  
→ 里山暮らしを目的に、移住された方が地域の過疎化を危惧
- ★ 地域活性化に取り組むことを一念発起！

活動を通じての喜び

年輪堂が、地域住民の交流の場として、使用されている時はもちろんだが、子どもからお年寄りまで、幅広い世代の方々の笑顔を見た時が一番の喜び。



### ステップ2

- ・ 地域活性化に向けた取組は、地域住民の理解・協力を得なければ、実施は困難  
→ 青年会議所や地域の運営委員会へ積極的に参加
- ★ 地域住民と交流を経ることで、地域に溶け込む。
- ★ さらに、地域住民との交流を通して地域が有する魅力と課題を認識！

### ステップ3

- ・ 地域には、かつて日本一と称された大茶樹があり、歴史を刻むシンボルとした公園(大茶樹公園)が存在
- ★ 住民が集う憩いの場としての整備へ！



※初代の写真  
(樹齢300年、高さ約4.5mといわれる。)



※現在の写真  
(2代目となり、樹齢約140年。)

### ステップ4

- ・ 整備に向け公園管理者である市と協議・調整
- ・ クラウドファンディングなどを活用した情報発信
- ★ 交流拠点の場が完成



※年輪堂  
(R2.6~)  
地域住民の憩いの場となっている。

### 今後の目標

【交流拠点のさらなる整備】

- ・ 憩いの場として整備した年輪堂が、より良い拠点となるよう思索(例：ベンチ設置など)している。

【移住者の呼び込み】

- ・ 移住希望者と空き家のマッチングを行い、地域に人を呼び込みたい。

【将来的には】

- ・ 地域課題である、高齢者等の交通手法として自動運転を導入するなど、地域に取組内容を還元したい。

## 6 鹿屋市高隈地区（高隈地区コミュニティ協議会）

## ～コミュニティ協議会による地域活性化～

### 【地区概要】

- ・人口（令和3年1月31日現在）  
1,476人（男性：711人，女性765人）
- ・世帯数（令和3年1月31日現在）  
817世帯

- ・年齢構成  
0～14歳：100人 15～64歳：673人 65歳以上：703人
- ・取組主体  
高隈地区コミュニティ協議会



### 活動のきっかけ・スタート

- ・人口減少，少子高齢化
- ・農業の担い手不足，耕作放棄地増加
- ・空き家の増加
- ・高齢者の買い物や病院への交通不便など



高隈地区のことを皆で考え  
やれるところはみんなできよう！

★目指す将来像  
高隈の恵みを活かして人々が集う  
郷（さと）づくり

### 活動における転換点（転換期）

- ・コミュニティ協議会設立  
（平成27年7月）  
→町内会や生涯学習など各々で実施してきた事業をコミュニティ協議会に一本化
- 我が地域「高隈」のことをみんなできよう！  
語り合う機会ができた。
- 豊かな自然がある。  
これを活かしていこう。

### 活動の中で苦労した点

- ・話し合い，イベントなどへの参加者が固定化
- ・コミュニティ協議会の活動が地域全体へ浸透していない。
- ・若者や女性の参加が低い。  
→参加できる人が参加でも良いのでは。  
無理強いはいらない。
- ・毎年度の事業計画で既存事業に固定化の傾向があり、新規事業の取り組みが弱い。
- ・自主財源確保の取り組みが進まない。

### 活用した支援策（国・県・市町村）

- 国：過疎地域等集落ネットワーク圏形成支援事業（平成29年度）
- 県：地域貢献活動サポート事業（令和元年度）
- 市：地域コミュニティ協議会交付金（平成27年度～令和2年度）

### 連携団体

- ・鹿屋市社会福祉協議会：ドライブサロンの協力機関のコーディネート
- ・社会福祉法人：ドライブサロンの車両，運転者の提供

### 代表者コメント



浜田会長

地域づくりはみんなできよう！  
みんなの力で！

0994-45-2525  
（高隈地区コミュニティ協議会事務局）  
（高隈地区交流促進センター内）

### きっかけ

- ・ 農業の担い手不足、耕作放棄地増加
- ・ 空き家の増加
- ・ 高齢者の買い物や病院への交通不便など

### 活動を通じての喜び

- ・ ツアー受け入れや元氣おこし祭りなどのイベント開催により交流人口が増えた。
- ・ コミュニティ協議会の活動が、新聞やテレビで紹介され、高隈の知名度が上がった。

### ステップ1

- ・ 高隈への観光誘致事業としてツアー客を受入（平成25年度～）  
【令和元年度実績：132人】

→ 地域の自然環境（谷田の滝）をルートに取り入れる。

→ 地元ガイドによる案内

→ 地域の食材を使った山菜弁当復活

★ 地域資源を活かす！



山菜弁当



### ステップ2

- ・ 高隈地区コミュニティ協議会（町内会・自治会・各種団体と連携）して、地域活動を広げる。

★ 高隈地区まちづくり計画書策定  
→ 皆で意見し、120を超える事業を短期・中期・長期に区分

★ 4部会にて活動中

### ステップ3

- ・ ドライブサロン（平成27年度～）

→ 協議会設立時のアンケート  
「生鮮食品を購入できる店がないため自ら運転する買い物へ。しかし、運転に不安あり。」

→ 社協及び社会福祉法人の協力により事業開始



★ 買い物支援だけでなく、参加者同士で語り合うなどの出合いの場の提供となり好評

### ステップ4

- ・ 休耕地の活用（平成28年度～）  
→ 収穫した米は販売し自主財源に。

・ 地域学校協働活動の推進

→ 体験活動の実施や郷土学習、学校奉仕作業の実施

・ 自転車の活用

→ インサイクルやサイクリングマップで観光名所のPRや住民の健康づくり



### 今後の目標

- ・ 地域全体にいきわたる活動を行っていききたい。

（一人暮らしの困り事の生活支援：有償ボランティア）

・ 地域の食材を活かした商品開発  
→ 自主財源確保

・ 交流人口を増やすための更なる取組

・ 定住人口に向けた取組

## 7 垂水市大野地区(大野づくり計画策定・推進委員会)

## ～地元特産品を生かした集落の活性化～

### 【地区(集落)概要】

- ・人口(令和3年3月31日現在)  
83人(男性:40人, 女性43人)
- ・世帯数(令和3年3月31日現在)  
49世帯

- ・年齢構成  
0～14歳:6人 15～64歳:26人 65歳以上:51人
- ・取組主体  
大野づくり計画策定・推進委員会(大野地区公民館)



### 活動のきっかけ・スタート

- ・人口減少により, 平成18年3月に大野小・中学校が閉校
- ・学校がなくなっただらどうする? 活用方法を模索
- 平成22年度「大野づくり計画」を策定市のモデル地区として, 10年後の「大野のありたい姿」を定める。

★住民の願い  
「大野の人を増やしたい  
(住む人, 来る人)！」

### 活動における転換点(転換期)

- ・「大野原(うのばい)いきいき祭り」を開催(平成22年度～)

→つらさげ芋が目玉

#### 【来場者数】

- ・1年目 800人
- ・2年目 3,400人  
→1年目の4倍を超える来場者  
つらさげ芋の在庫が足りず。
- ・3年目 1,500人

→2年目に「つらさげ芋」の準備が足りなかった経験から, 必要数を絶対に切らさない生産体制の構築を目指す。

### 活動の中で苦労した点

- ・「つらさげ芋」の生産工程は肉体労働で1シーズン・1生産者あたり1,000本の植え付けを行うため, 労働力が必須
- 大野地区では, 鹿児島大学の演習林を通じて交流のあった同大学の協力により, 大学生の力を借りた生産を行うことで不足する労働力をカバー
- ★労働力の解決だけでなく, 地域外の若者との新たな交流が生まれる相乗効果!

### 活用した支援策(国・県・市町村)

- 国: 過疎集落等自立再生緊急対策事業(平成24年度)  
過疎地域等集落ネットワーク圏形成支援(平成27年度)
- 県: 鹿児島県市町村協働の仕組みづくり促進事業(平成24年度)
- 市: 垂水市まちづくり交付金(平成23～令和2年度)

### 連携団体

- ・NPO法人森人くらぶ: 「つらさげ芋」の生産等の支援
- ・鹿児島大学演習林: 「つらさげ芋」の生産等の支援, 棒踊りの披露など

### 代表者コメント



地域が過疎を迎える中, 女性や若者と協働を積み重ねることや, 外部からの人を快く迎え入れ, 一体となって活性化に取り組むことが大切です。

0994-32-1143(垂水市企画政策課地域振興係)



## 活動の きっかけ

- ・大野小・中学校の閉校

### ステップ1

- ・人口減少により、平成18年3月に大野小・中学校が閉校
- ・地域から活気が失われることに危機感を感じた住民が話し合いを重ね、「大野づくり計画」を策定（平成22年度）



### 活動を通じての喜び

- ・「つらさげ芋」の生産等により、地域経済が活性化
- ・それに伴い、地域外に出ていた家族が定期的に大野に戻ってくるようになったことや、若者が仕事の手伝いのため地域に訪れるようになったことに喜びを感じる。

### ステップ2

- ・特産品として定着してきた精度36度の「つらさげ芋」を目玉にした「大野原（うのばい）いきいき祭り」を開催

→毎年1,500人が訪れるなど地域に活気もたらされると共に、「つらさげ芋」のブランド化により地域経済が活性化！



### ステップ3

外部人材との連携（例：鹿児島大学演習林）

- ・「つらさげ芋」の生産に協力
- ・豊年祭にて、伝統芸能である大野棒踊りに挑戦



- ・平成25年度には鹿児島大学学園祭で棒踊りを披露し、文化交流にも発展

### ステップ4

- ・平成27年、国の交付金を活用し、「つらさげ芋」のブランド化成功で不足した芋の干し場の建設と耕作のためのトラクターを購入



→体制強化により生産量大幅アップ！

### 今後の目標

- ・大学生が居住できるキャンプ施設やログハウスなどの建設  
→地域に住み、地域に協力しながら、大学に通うことができるような体制をつくりたい。

## 8 龍郷町荒波地区（一般社団法人E' more秋名）

～地域おこし協力隊制度の活用がきっかけ！～

【地区概要】(秋名・幾里集落)

- ・人口(令和3年1月1日現在)  
350人(男性:164人, 女性186人)
- ・世帯数(令和3年1月1日現在)  
210世帯

- ・年齢構成  
0～14歳:43人 15～64歳:146人 65歳以上:161人
- ・取組主体  
一般社団法人E' more秋名



### 活動のきっかけ・スタート

- ・龍郷町では、人口減少と少子高齢化が著しい荒波地区の振興が積年の課題  
→人の流れを生み出し、地域の稼ぐ力の創生を目的としてプロジェクトがスタート(平成28年)

#### 【取組内容】

地域おこし協力隊を同年に初採用するなど、地域外の人材を取り込み、地域活性化を目指す。



地域外の人材を活用し、  
地域の活性化を目指す！

### 活動における転換点（転換期）

- ・地域と行政のパイプ役として地域おこし協力隊が活動

【平成28年】

荒波地区活性化委員会が立ち上がり、同年から採用された地域おこし協力隊員も参画

★地域活性化へ向け、地域住民等の声を受け止め、行政へ届ける。

【平成30年】

地域住民の有志により「一般社団法人E' more秋名」設立(隊員は退任後も地域に定住)

★飲食・宿泊施設の拠点整備へ！

【令和2年】

★町により「荒波龍美館」整備！  
(E' more秋名が管理運営)

### 活動の中で苦労した点

- ・龍郷町初の地域おこし協力隊採用であり、当初は活動内容に四苦八苦。  
→まずは地域を知ることが大切と、地域情報の収集作業
- ★地域を知ること、地域住民との距離感も縮まる。

#### 【具体的取組】

- ・地域(龍郷町)の歴史  
→図書館での情報収集
- ・地域を知る  
→集落を散策
- ・人を知る  
→住民との積極的なコミュニケーション など

### 活用した支援策(国・県・市町村)

国：地方創生加速化交付金(H27補正)  
奄美群島成長戦略推進交付金(H30～R2)  
その他：地域活性化センター補助金(H29)

### 連携団体

龍郷町：国等の交付金を活用し、荒波地区の地域活性化を推進

### 代表者コメント



村上代表

お陰様で今まで荒波地区に訪れることがなかったお客様が何度も足を運んで下さることを嬉しく思います。まだまだ道半ばですが、地域で協力しながら、笑顔あふれる魅力的なシマの暮らしを伝え続けたいと思います。

0997-69-4512 (龍郷町企画観光課)

きっかけ

人口減少と少子高齢化が著しい荒波地区の振興が積年の課題

活動を通じての喜び

子どもからお年寄りまで、笑顔があふれているのを見ると、「荒波のやどり」が居心地のいい場所になっていると実感する。地区内外を問わず、幅広く愛される場所となってもらいたい。

今後の目標

【交流拠点からの情報発信】

・「地域ならではの豊かな暮らし」を、外部に情報発信していく。

【移住者の呼び込み】

・移住希望者と空き家のマッチングを行うなど、地域に人を呼び込む。

※「荒波龍美館」内に、移住ガイドセンター「住もうディ！」を開設。  
(協力隊員が常駐)



### ステップ1

【平成28年度】

- ・龍郷町で初となる地域おこし協力隊員が採用
- ★地域のファシリテーターとして役割を担う！

※協力隊員(村上裕希氏)  
(写真は令和元年度時点)



### ステップ2

【平成30年度】

- ・地域住民の有志で「(一社)E' more秋名」を設立  
(理念)若者を呼び込み、賑やかな集落作り



※E' more秋名代表理事(後ろ中央)と地元スタッフの皆さん  
(写真は令和2年度時点)

### ステップ3

【平成30年度, 令和元年度】

- ・空き家を改修したゲストハウスの運営をスタート
- ★(平成30年度)「GAMA(がま)家」整備

※「ガマ」は、奄美の方言で「イタズラ」を意味し、「童心に帰って楽しめる家」がコンセプト



★(令和元年度)「どうぬ家」整備

※「どうぬ家」は、奄美の方言で「わたしの家」という意味



### ステップ4

【令和2年度】

- ・飲食・宿泊施設の交流拠点である「荒波龍美館」が完成(令和2年6月)



※落成式



※内観

## 9 宇検村崎原地区（阿室校区活性化対策委員会）

## ～地域で支える親子山村留学～

### 【地区概要】

- ・人口（令和3年1月30日現在）  
213人（男性：104人、女性109人）
- ・世帯数（令和3年1月30日現在）  
121世帯

- ・年齢構成  
0～14歳：29人 15～64歳：97人 65歳以上：87人
- ・取組主体  
阿室校区活性化対策委員会



### 活動のきっかけ・スタート

- ・人口減少が進み、学校の存続危機に直面  
→ 学校存続に向け、「阿室校区活性化対策委員会」を立ち上げる。（平成21年）

#### 【取組内容】

親子での山村留学に取り組み、地域外からの人の流れの創出を目指す。



地域一丸となって、親子山村留学に取り組み、学校存続を目指す！

### 活動における転換点（転換期）

#### 【平成21年】

学校存続の危機に直面したことから、校区全世帯の意向調査を行う。  
→ 学校存続に向け、各集落の代表等で、阿室校区活性化対策委員会を立ち上げる。

- ★ 親子山村留学制度の仕組み作りスタート

#### 【取組内容】

- ・ 親子山村留学のPR  
→ パンフレットやホームページ作成
- ・ 受入体制の整備  
→ 住宅確保や保護者の就業先情報の提供 など

### 活動の中で苦労した点

- ・ 移住者の生活拠点となる、住宅を確保することが一苦労  
→ 空き家であっても、お盆や年末・年始の帰省先として、所有者が保有するケースもある。  
★ 地元住民の協力のうえで、受入が途切れる事態にはなっていない。
- ・ 地域住民主体の取組であり、就業者にとっては、新たな取組に参画する余裕がない場合がある。  
★ 隙間時間に高齢者とお茶をするなど、負担のないコミュニケーション（見守り）を実践

### 代表者コメント



吉久会長

立ち上げから12年、ここまで続けて来られたのも、地域の方の協力があったの事だと思っています。現在の問題は貸してくれる空き家がなく、留学の受け入れを停止せざるを得ない点ですが、今後は空き家の家主と定期的に交渉していくとともに、就労先の斡旋など、更に移住しやすい環境を作っていきたいと考えています。

### 活用した支援策（国・県・市町村）

県：共生・協働のむらづくり活性化事業に係る補助金（H26, 27）  
地域貢献サポート事業に係る助成金（H30）  
村：宇検村校区及び併設校活性化（山村留学）対策事業補助金（H21～）

### 連携団体

株式会社ねりやかなや・奄美群島への移住支援サイト「ねりやかなや」で親子山村留学の情報発信

0997-67-2261（宇検村教育委員会事務局）

きっかけ

人口減少が進み、  
学校の存続危機に  
直面

## ステップ1

【平成21年】

- ・学校の存続に向けて、地区住民が奮起  
→阿室校区活性化対策委員会を立ち上げ、地区外から人の流れ創出を決意



※ 崎原地区  
の皆さんの  
写真は  
平成30年度)

## ステップ2

- ・親子山村留学での移住者受入のため、地域住民による空き家改修



※ 地域一丸となつて、移住者のために、活動を行います。

※ 必ず、親子で移住体験をしてもらおう。

活動を通じての喜び

親子山村留学で来られた方が、地域に溶け込み、楽しそうに生活する姿を見ると、嬉しく感じる。  
引き続き、地域全体で親子山村留学が継続できるよう取り組みたい。

※ 天皇杯  
受賞  
祝賀会



今後の目標

- ・これまでの取り組みにより、学校の廃止という話題は、聞かなくなった。  
→親子山村留学により、毎年、継続的に移住者の受け入れがあり、当初の目的は達成できた。  
★ 今後も現在の取り組みを継続させ、学校を存続させるとともに、親子山村留学で育児世代が移住されることで、地域がより活性化することを目標としている。

## ステップ3

- ・親子山村留学で移住された方が、地域の農業振興に参画



※ 移住された方が頼りとされ、地域に溶け込むきっかけに。

- ・地域振興として、在来ニンニク復活に向けて取り組む。



※ ニンニクは商品化され、地域全体の所得アップに貢献

## ステップ4

【平成29年】

- ・地域での取り組みが認められ、農林水産祭で「天皇杯」受賞



※ 式典